

新聞を用いた多面的な社会の理解の推進と公民的資質の形成

～地歴公民の授業を中心に～

兵庫県立篠山東雲高等学校 校長 丹後 政俊

教諭 池田 敏晃

◇はじめに

本校は平成 25 年度より N I E 実践校の指定を 2 年連続で受け、地歴公民科を中心として新聞を利用した授業展開の研究を実施した。本稿においては、平成 26 年度の取り組みについて述べたい。

◇本校の現状と課題

本校は篠山市の東端に位置し、平成 23 年に篠山産業高校から分離・独立した「兵庫県で一番小さな」「古くて新しい」農業高校である。全校生徒は 1 学年 1 クラスの 110 人という小規模校である。例年、卒業生の約 3 分の 2 は就職希望で、うち大半の生徒が地元の企業に就職している。

生徒の課題としては、小・中学校における成功体験が少なく、そのため、自尊感情が低い傾向がある。従って、本校での学習活動をきっかけとして成功体験を実感すれば、自尊感情が高まり、さらなる活動への契機につながっていくと考えられる。

◇実践内容

1. 新聞コーナーの設置

本校は、B 型の実践校であったため、昨年度より引き続き 4 カ月にわたり新聞 6 紙の提供を受けた。昨年度の課題として、新聞購読者が少なかったため、本年度は、昨年度から引き続き図書室内に「新聞コーナー」を設け、生徒が新聞をいつでも読める

ようにした。また、図書室の外の階段踊り場に「今日の一面コーナー」を設置し、生徒が新聞に興味を持つようにすると同時に、新聞を読んだら名簿に「○」を付けていくポイントシートを図書室に設置して、生徒の意欲を高める工夫を行った。

また、昨年に引き続き、社会科の授業で教員が気になった記事の紹介やニュースの解説を行った。これについても、本年度は、国語科でも新聞記事の紹介をしてもらい、進路指導部にも面接対策の一環として新聞を読むことを奨励してもらうようにした。その結果、3 年生を中心に新聞を読む生徒が増加した。



[図 1 図書室内の新聞コーナー]

2. 授業における新聞の活用

昨年度の反省点の一つとして、通常の授業で教材として新聞を活用できなかったというのがあった。

そこで、本年度は授業で積極的に教材と

しての活用を目指した。

今回、新聞を活用した授業は社会科のうち、3年生の必修「現代社会」と2年生の選択科目「地理」の2科目である。

まず、「地理」の授業では、「日本の自然災害と防災」で新聞を活用した。まず、新聞縮小版を用いて過去、地域で起こった災害について学んだ後、防災への取り組みについて学習した。その上で、平成26年9月2日付神戸新聞の「南海トラフ地震津波被害想定図」を用い、今後、地域でどのような災害が想定されているのか、そして、その災害に対してどのような防災政策が行われているかを学習した。

また、この単元を学習中に広島市と丹波市での土砂災害や御嶽山の火山災害が発生した。そこで、これらの災害について解説する特別授業を実施、教材に新聞記事を用いて、災害の概要やメカニズムについての解説を行った。

次に「現代社会」では、NIEの指定を受けていることから、「新聞の読み方」と題して授業を行った。概要は以下の通りである。

【第1回】「新聞はなぜ、生まれたのか」

近代市民社会が発展していく過程で、世論の形成が必要になってきた背景から新聞が誕生し、その後、マスメディアになっていった過程を学習した。

【第2回】「プロパガンダと新聞」

マスメディアの登場とともに、それを利用するプロパガンダが登場した。プロパガンダがどのように行われ、そこに新聞がどう使われたか。また、新聞が世論をあおっ

た結果、どのようになったかを、支那事変（盧溝橋事件に端を発する日中戦争）と第2次世界大戦の新聞記事を例にし、W.リップマンの『世論』を解説に用いつつ説明した。

【第3回】「シンブンウソツカナイ？」

前回の授業で行った世界大戦中のようなプロパガンダはないものの、特定の方向に世論を誘導するためなど、さまざまな目的のために現在でも誤報や虚報が存在することを、朝日新聞の「吉田調書」や「従軍慰安婦」をめぐる一連の事件を教材にして解説し、同様の事件が社会に与える影響について学習した。

【第4回】「新聞のホンネ」

池上彰氏の著作を資料にして、「一両日中」「関係者筋」などといった新聞独特の用語の意味を導入として、同じ事象を扱った記事でも新聞社の立場により、記事の内容が異なってくることを説明した。そして、新聞を読む際には「新聞社が何を主張したいか」を考えた上で読む必要があることを学習した。

【考査】「報道の自由とは？」

定期考査では、それまでの授業で習った知識を問うのではなく、自分の意見を述べさせる問題を出題することにより、生徒の考えをさらに深めさせた。出題した問題は、
・「フランスの風刺雑誌社が襲撃されたことを受けて、報道の自由はどのようにあるべきか、自分の意見を述べよ」
・「終業式の校長訓話を好意的な記事と批判的な記事にせよ」

というものであり、この試験問題を解くことにより、生徒は「新聞とどう接していくべきか」をさらに深く考えられるようになった。

3. 新聞記者を招聘しての特別授業

現代社会の「新聞の読み方」の総仕上げとして、神戸新聞丹波総局の井垣和子記者をお招きし、3年生35人を対象として「公平な報道を行うために」と題し、特別授業を行った。

この授業で井垣記者に事件を取材する時の心構えや、いかにして正確で公平な記事を書くかを具体的な体験談を交えながら話していただいた。

また同時に、新聞がどのようにして作られていくかについても、具体的な事例を挙げて説明していただき、生徒たちは、授業内容を再確認するとともに、身近な新聞の制作過程も知り、新聞全般に対してさらに興味を持つことができた。



[図2 井垣記者をお迎えしての授業]

4. 新聞を利用した課題の実施

本校では、実践指定校になる以前より、保健の授業で長期休業中や学期末に新聞スクラップを課題として実施していた。提出された課題の感想欄には、「自分で保健に関

する記事を探して、記事の内容を調べることで、保健についての興味がさらにわいた」などといった、新聞スクラップの効果を示す感想が見られていた。

これを受けて、昨年度の社会科でも、「現代社会」の長期休業中の課題として新聞スクラップを実施した。その結果、「新聞スクラップにより、新聞を毎日読む習慣ができた」「記事を読み、自分で分からない用語を調べるうちに現代社会への興味がわくようになった」などと、課題を通じて新聞を読む習慣ができ、現代社会に興味を持つようになるなどの効果があることが分かった。そこで、今年も昨年と同様、長期休業中に新聞スクラップの課題を実施した。

さらに、本年度は夏休みに「第5回ひょうご新聞感想文コンクール」に全校生徒が参加した。生徒に感想を聞くと、昨年度と同じように「新聞を読む習慣ができた」「新聞を毎日見ていたので、社会のニュースに関心が向き、就職試験の面接で役に立った」などの感想が聞かれた。

しかし、その一方で「そもそも、家で新聞を購読していないので、苦労した」「インターネットでの配信の記事も新聞なのだから認めてほしい」との声もあり、これについては対策が必要と考える。

5. 他の取り組み

その他にも、本校では新聞を用いたさまざまな取り組みを行っている。

その一つに新聞記事の掲示がある。本校生徒が取り上げられた新聞記事をスクラップして外部に配布すると同時に、当該記事を校舎内に掲示している。これを見ることによって、生徒が新聞を身近なものと感じ

る一助になると考えている。

また、3年生のLHRでは、受験対策として定期的に新聞の社説を要約し、感想を論述する練習をしていた。これにより、生徒の文章能力の向上を図ることができた。



[図3 掲示された新聞記事]

6. おわりに

今回2年間にわたりNIE実践校の指定を受け、以下の点で効果があったと言える。

第一に、生徒たちに新聞に触れる機会が多くなったことである。実施前に新聞購読をしているかどうかを調査したところ、2年間とも、少なくない生徒が家庭で新聞を購読していないことが分かった。また同じく、少なくない生徒が家庭では新聞を取っているものの、読む習慣がないことが分かった。

このような生徒に対して、授業を通じて新聞に興味を持たせられたことは、新聞に親しみを持つ上で効果があったものと思われる。また、課題を通じて新聞を読む機会を作ったことは、新聞を読む習慣を身に付ける上で効果があったと言える。さらに、新聞を通じて活字に触れる機会が多くでき、読み方が分からない漢字調べを通じて、国語の学力も向上したと言える。

第二に、通常では得難い経験ができたこ

とである。

通常ならば、なかなか新聞記者などを招聘して話を聞くことは難しいが、今回のNIEの実践により、新聞記者から貴重な体験談を伺うことができた。その結果、授業での学習がさらに深まり、大いに効果があった。こうした体験は、NIEの成果の一つであった。

第三に、新聞を通じて生徒が社会の出来事に関心が向いたことである。

それまで、現代社会の授業で、世の中のさまざまな事件を扱った際にも、なかなか生徒が社会に関心を持つことがなかった。しかし、今回の実践指定を受け、教員自身も新聞から「up to date」な話題を提供し、さらに生徒自身も自ら新聞を読む機会を作ったことにより、社会のニュースに毎日触れることによって、社会の出来事に関心が向くようになった。

他にも、教材にできる記事が豊富に新聞から取れたことは社会科のみならず、他の教科にとっても授業研究を行う上で大いに効果があった。この点については、NIE実践指定が終わった後も、複数の新聞購読を学校で継続することを検討していきたい。

2年間にわたりNIE実践指定を受けた結果、以上のような効果があった。しかし、あえて課題を挙げるならば、今回の実践では、社会科と国語科、さらに進路指導部と共同して実践できたが、その他の教科とは連携できなかった。全教科にまたがった実践については、他日の連携によって実践方法を研究していきたいと思う。